

朱-akari- エッセイと短歌のフリーペーパー

休日の朝ごはんは何がいいかを尋ねたところ、ハムエッグが食べたいと言う。夫と同棲を始めて間もない頃のことである。平日はフライパンを出すのも面倒なので、パンに何かを塗ったり挟んだりして、とりあえず空腹を満たすことしか考えていない。これではあまりに不健全だ。食事を楽しむには時間的余裕が不可欠で、休みの日くらいは食べたいものをきちんと食べるべきだと思う。

そういうわけでリクエストを受けたハムエッグを作つて皿によそい、こんがり焼いたトーストと一緒に食卓へ運んだのだが、そこで彼の表情が「?」となった。

「ハムエッグってこれだけ？」

わたしが手にしたプレートには、焼いたハムの隣に、たっぷりのスクランブルエッグが添えられていた。

ご存知の通りハムエッグは、ハムの上に卵を割り落として目玉焼きにする料理である。ところがハムエッグと言われて、わたしは迷わず卵をスクランブルエッグにしてしまったのだ。どこでこの間違ったイメージが定着してしまっていたのだろう。

ハムエッグが食べたいと人が言うとき、濃厚でとろりとした半熟の目玉焼きを想起せずにいられないわけで、その口になってしまっているところにスクランブルエッグを出されてもそれは期待に応えられるものではない。しかし、彼の思い描いたハムエッグを振る舞えなかったこと以上にショックだったのは、「ハムエッグってこれだけ？」と言われたときに「そりやそうだよハムと卵だもの」と、内心自分の過ちを全く疑わなかったことである。ハムエッグのエッグはスクランブルエッグではなく目玉焼きだと指摘されても信じられず、ネットで真偽を確かめて、間違えていたのはわたしのほうだとようやく気がついたのだ。

「目玉焼きだった、ごめん」

しばらく意地を張っていたが、片付けをしながらそう謝ると、「ほらね」と笑い声が返ってきた。こんなことで怒ったりしない。彼はとても寛容なのだ。

後からこのときのことを話したら、彼は調理方法を間違われたことより、間違いを指摘されたわたしの落ち込み方がひどかったことのほうが印象に残っているらしい。本当は間違えてしまったこと自体よりも非を認められなかったことに絶望していたのだが。いくつになっても謙虚に生きたいものである。

穏やかな土曜日、今やわたしよりもまめに朝食を作るようになった夫が目玉焼きを焼いている。慌ただしく過ぎてしまう日々へのささやかな抵抗として、わたしたちは今日も食事を前に手を合わせる。なんてことのないこんなときでさえ、ひょんなことから記憶に残る大切な瞬間になるかもしれないのだから。

ハムエッグ事件のときもそうだったきみは小さくほらねと笑う

—2025年5月16日 うたの日 題『ほら』より

プロフィール

真島朱火(まじま・しゅか)

2018年より短歌投稿サイト「うたの日」にて作歌を始める。2023年文学フリマ東京36に続き、今回の文学フリマ岩手10が二回目の出店。私家版歌集『星に願いが届くころ』『波とメガホン』を販売中。

連絡先▷vsss.shuca@gmail.com

▷X(旧Twitter)

アカウント:@shuca_m
日々短歌を投稿しています



▷BOOTH

私家版歌集や短歌グッズを販売しています

